



東京都立武蔵高等学校
同窓会事務局
東京都武蔵野市境 4-13-28



木洩れ陽の林

25回1組 木村秀夫

●同窓会総会のお知らせ●

謹啓

風薫る5月、同窓生の皆様にはお健やかにお過ごしのことと存じます。年に一度のお便りを今年も無事お届け出来ることを嬉しく思います。この記事を書いている頃は、武蔵高校もまだ春休み、ただ満開の桜のもと、校庭で、体育館で、ラグビー・テニス・野球・剣道・バスケットなどの部活動が繰り広げられて居りました。武蔵生はやることはやる、と言った評判ですが、それぞれに青春を謳歌しているのを見た思いです。我々の高校生活はどうであったかとひととき感慨にふけりました。

さて、この会報であります、これまで新聞形式をとって来ました。しかし、年に一度の新聞というのもどうか、新聞だとすぐさま捨てられはしないか、との思いから体裁を変え、しかもカラー紙面を取り入れて見ました。運営委員会も活動して来たことだし、少しずつでも会報を充実させて参りたいと思います。皆様のご意見、クラ

スや会員の情報を沢山、沢山お寄せください。原稿の形式は問いません。カラー写真も歓迎です。宛先は、題字の右に記載されている、同窓会事務局でございます。

昨年度から総会の日取りが、毎年6月の第1日曜日に変更になりましたが、今年はその2回目です。会員の皆様の意見交換の場として、また先生、同窓生同志の旧交を暖める場でもあります。クラス会を併せて御計画されては如何でしょう。

敬具

記

日時：平成5年6月6日(日)13：00～16：00頃迄

場所：母校会議室

会費：無料

他：当日、受付にて年会費の納入受付も行っております。クラス会・同期会のための教室を御用意出来ます。早目に事務局迄御連絡下さい。



武蔵高校に発展あれ

前校長 篠原宗康

同窓会会員の皆様には、ますますご健勝にてご活躍のことと存じます。今年の3月で本校の卒業生の数は2万人を突破しました。各所で武蔵高校卒業生の活躍の様子を耳にし、頼もしく感じています。また、母校への愛着の情と熱い期待を感じ、有り難く思っています。

さて現在、高校教育の改善の為に、入学選抜制度の見直しや、教育過程の改変などが検討されています。入学選抜制度では、既存の学区を越えた地域からの受験を認め、単独選抜が行なわれます。入試の科目や配点の比率も、各高校で決めることになりそうです。従ってそれぞれの学校が特色ある教育を目指して努力することが大切になります。

武蔵高校の基本方針は、知・徳・体のバランスのとれた人間の育成という、従来の教育方針を変えないことにしています。同窓生諸氏が築かれたよき伝統・よき校風は、そのまま武蔵高校の特色として高く評価されるものと思っています。

私は僅か2年間で武蔵を去ることになりましたが、教員生活の最後をこの素晴らしい学校で過ごすことが出来たことを、大変嬉しく、光栄に思っています。

武蔵高校とその同窓会が、益々発展されますよう祈念して、お別れの言葉と致します。

輝かしい歴史と伝統のある本校に着任出来ましたことを、大変光栄に思いますと共に、その責任の重大さを痛感致して居ります。

本年度より都立高校は、単独選抜制度の導入、新教育過程の実施と、大きな変革の年を迎えようとして居ります。親と子供の願いを実施させ、同窓生の皆様の期待に応えるよう全力を尽くしたいと思っています。どうか宜しくお願い致します。



着任のご挨拶

校長 嵐田 薫

4月1日、着任の日、玉川上水沿いの土手道を歩いている時、京都を旅した時に歩いた「哲学の道」の風景が頭をよぎりました。銀閣寺から南禅寺へ抜ける疎水沿いの土手道が哲学の道です。哲学者の西田幾太郎が朝夕散策し、哲学への思索に耽った道です。

この玉川上水沿いの道も、多くの同窓生達が散策し、青春時代の思索に耽ったことだろうと思います。

武蔵野の面影が残るすばらしい環境に恵まれ、

●第二の故郷便り

「武蔵」という言葉を耳にすると、古い木造校舎、演劇部、文化祭、校歌、ご心配を掛けた担任の吉見先生、若き日の田部井先生のお宅での読書会……後から後から様々な思い出が頭に浮かび、何から話してよいか分からなくなります。が、今与えられたのは「第二の故郷便り」というコラム。本題に移ります。

徳島に来て30数年、第二の故郷と言ってよいでしょう。徳島に来たのは持病の喘息で、親戚の所に転地療養に来たのがその切っ掛けでした。

その後、大学で教職過程を取り、徳島の教員採用試験を受け、2年目に正規採用となりました。

最初に赴任したのが、日本2大秘境の一つ、祖谷でした。祖谷は、源平の合戦に破れた平家の落人が、安徳天皇を連れて落ち延びたと言う伝説がある所です。平家の軍旗赤旗があったり、墓は目立たないよう平たい石を伏せて作ってあったりします。池田高校のある池田から、バスで2時間余り、最初霧の中を赴任して行った時は、何処まで連れていかれるのかと不安になりました。徳島の人々も、こうした僻地勤務は嫌で、3年義務泊という制度が新採用者には課せられます。私は住めば都、何時迄も住んでいいという気になりました。祖谷で新婚生活を送った訳です。しかし、5年目に同じ郡内の平地校に転勤させられました。私の妻澄子（旧姓清水）とは武蔵で同じ演劇をやった仲。校内演劇コンクール・オールB組で老夫婦役を二人でやり、現在実生活でその境地に達しているのも思えば不思議な縁。

現在の私は、定年30年をあと一年残して昨年教職を退きましたが、祖谷での教職生活は最も

鮮明で印象深いものとなりました。

奇しくも昨年5月、始めて担任をした生徒達の同窓会が開かれ、彼等に名前を覚えて貰った長女恭子が25才、そう25年振りの再会となりました。

徳島は、阿波藩主蜂須賀公が始められたという阿波踊りが8月の夜、エネルギーに繰り上げられます。人形浄瑠璃で有名な「傾城阿波鳴門」の主人公十郎兵衛が藍商人でしたが、藍染めは今でも徳島の特産品です。今、春、昔な

がらの白装束の御遍路さんの姿が見られます。八十八箇所、第一番礼所が徳島の鳴門にあります。鳴門にはご存知渦潮があり、これからが見頃です。現在私は、その鳴門の近くで造園の仕事をしています。娘が代わりに教職の道を進

み始めました。東京には未だ元気な老母や姉妹が居りますので時々上京し、その都度、中・高・大と同じ道を歩んだ小野惣一郎君、同窓会長の若井博君などの同級生と会うのが楽しみです。そう言えば、大菩薩ヒュッテの懐かしい写真が会報「むさし」に載っていました。

「むさし」の発展を祈念し、私の責を果たせていただきます。

武蔵の卒業生の中にも、東京を遠く離れ、北は北海道から南は沖縄、更には大海を渡って異国の地へ赴任し、あるいは嫁いで行き、そこを第二の故郷としていらっしゃる方々も沢山居られることでしょう。御手元に届く「むさし」を読まれながら、それぞれの第二の故郷での暮らしぶりや、お国自慢、苦労話などをお寄せ下さい。写真があれば尚歓迎です。

編集部記



●TAMAらいふ21について

(多摩東京移管百周年記念事業)

坂口 一 道 (高校17回C組)



多摩21くらしの祭典会場鳥瞰図

ほとんどの皆さんが高校時代を過ごした多摩地域は、100年前までは神奈川県に属していました。しかし、多摩川と玉川上水の水源の一括管理の必要性を目的に明治26年（1893年）に当時の東京府へ移管されました。平成5年は多摩東京移管百周年を迎えることからこの歴史的節目を捉えて、多摩地域が抱える諸課題を東京都と32市町村、住民、大学、企業が連携して取り組み、21世紀の多摩のまちづくりを先導することを目的にTAMAらいふ21協会が設立されました。

協会は約120人の職員で構成されていて私もその一員として働いています。

多摩地域は今や365万人の人口を抱え、約80もの大学があり、また高度に情報化された産業が集積し全国有数の工業出荷額を示すようになってきました。しかし、行政区画が狭く効率性が低いといわれています。また、住民の目も都内を向いており、なかなか多摩地域を向いてくれません。このような状況から記念事業を契機に「多摩新時代の創造」

を展開しようとしています。

主な事業は、課題解決型のプログラム（リサイクル、都市型近郊農業、多摩川の復権、湧水崖線の保全、芸術・文化、スポーツ、自治とくらし、地域振興）と東京都や市町村が行う地域企画プログラム、市民が行う自主企画プログラムがあります。これらの事業は今年の4月から11月まで多摩全域で多彩に繰り広げられます。

一方、立川市にある国営昭和記念公園では7月31日から11月7日までの100日間多摩21くらしの祭典が博覧会形式で開催されます。会場では、21世紀の多摩のくらしをかいま見、楽しみながら参加体験できるよう工夫をしています。

TAMAらいふ21の内容については市町村の広報紙、協会の機関紙に掲載されています。

ご参加、ご来場をお待ちしております。

問合せ先

TAMAらいふ21協会

〔武蔵野画家 木村秀夫氏〕

「林をいでて、林にいり 道つきて、また道あり」

土岐善麿のこの歌は武蔵生共通の財産であります。最近の宅地開発により、懐かしい武蔵野の風景が失われていくのは残念であります。武蔵生が登校の折り折りに散策し、何気なく武蔵野だなあと感じていた、こならやくぬぎ林にぞっこん魅せられた一人の男がいます。木村秀夫、39才、職業、画家です。彼曰く、あれは人々が暮らしをたてる為に作った人工林である、と。畑を作る横に、防風林としてほぼ同じ大きさの林を作り、落葉樹を植え、木を切っては薪炭を作り、落ち葉は土地を肥やす堆肥源としたのです。彼の自然観は、人間の営みと自然との調和美にあり、武蔵野こそまさにそれだということです。

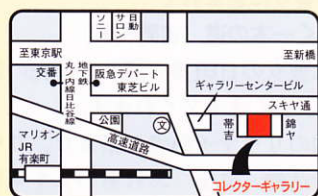
小金井堤に育ち、武蔵高校に通った彼は、今から12年前、あるテレビの番組のなかで武蔵野を描く画家の話に天啓を受け、登り詰めたフランス料理のシェフの座を投げうって、絵の道に入ったのです。絵描きになろう、というのではなく、武蔵野を見直そうとスケッチ・ブックを手にともかく雑木林に向かって行ったのです。始めのうちは下手だった、とはにかむ彼は努力の人であり、今回その一端をご紹介しましたが、今では新進の作家として前途を有望視されるようになりました。武蔵野にのめり込んだ彼は、「山林に自由存す…」の国木田独歩に傾倒し、武蔵野の開拓を可能にした玉川上水やその分水の保護運動へと、その活躍の場は留まるところを知らないようです。(目黒記)

木村秀夫個展のお知らせ “武蔵野を描く”

6月5日(土)～10日(木)11:00～19:00

銀座コレクターギャラリー

中央区銀座6-3-6井出ビル2階



秋川暮色



残雪の雑森



新緑の古道

平成5年度(第45回生)幹事

『専用ポストが出来ました』

学校に同窓会の専用ポストが設置されました。正面玄関に入ってすぐ、事務室の前です。同窓会への連絡や、ご意見、会報への投稿など、お気軽にご利用ください。